

[シンポジウム]

「グリム・メルヒェンと『魔女』」報告

2004年9月25日

浜本隆志

はじめに

ドイツでは16-17世紀にかけて、魔女狩りの嵐が吹き荒れたが、この魔女現象は、ドイツ史や社会史のみならず、ドイツ文学にもおおきな影を投げかけた。とくにその典型例は、グリム兄弟のメルヒェンのなかに認められる。今回のシンポジウムでは、本学の3人の大学院生たちがメルヒェンと歴史という両面から、魔女の問題を取り上げ、歴史や文学のなかで魔女とは一体何であったのかを明らかにすることを目指した。

まずグリム兄弟のメルヒェンのなかに、魔女が登場するものがいくつかあるが、とくに有名なものは、『兄と妹』、『ヘンゼルとグレーテル』、『白雪姫』などである。本報告ではまず、鬼束がこれらのメルヒェンのなかで描かれた魔女像を、ジェンダーの視点をまじえて具体的に確認することにした。

その後、史実の魔女の実態と魔女裁判については、奥田が担当した。ここでは主として16-17世紀のドイツの魔女狩りや魔女裁判が、民間信仰のなかの魔女像と密接にかかわりながら実施された内実を明らかにしている。さらにこれらが、グリム・メルヒェンと具体的にどう関連していたのかも、合わせて解明しようとした。

溝井は魔女狩りにプロセスのなかで実施された残酷な拷問を、おもに民俗学的な視点から図像をもちいながら説明をおこない、これらがケルトやゲルマン文化と相関関係があることを解き明かそうとした。

なお当日の司会は浜本がおこなったが、以下はシンポジウムの報告内容の記録である。